

空間のドラマツルギーと異文化理解 韓国集落空間研究の序として

山中 冬彦

家政学部住居学科

(2003年9月11日受理)

Spatial Dramaturgy and the Understanding of Different Cultures As a Preface to the Spatial Investigation of Korean Villages

Department of Housing and Design, Faculty of Home Economics
Gifu Women's University

YAMANAKA Fuyuhiko

(Received September 11, 2003)

0. はじめに

今日韓国に見られる集落の成立基盤には或る伝統的な空間構造が垣間見られ、韓国の研究者はそれを「限定 Definition」・「軸 Axis」・「位階 Hierarchy」などと整理している。

この伝統的な空間構造は、巫俗（シャーマニズム）を中心とした民間信仰・儒教・風水思想などを背景とし、それらの社会的秩序やコスモロジーをいわば典型的に示しながら制度的に維持されてきたものである。

ところで、私たちがその集落を客体として眺めることを留保し、身体をもっていわば「住み込む」ことを試みると、その構造は激越ではないにしろ動的に揺らいでいるものである。例えば集落の「限定（＝領域境界）」は、毎年行なわれる共同体祭時の神域を<巡廻する>行為や神域を<見る>行為、そして亭子（チョンジャ、吹き放ちの高床式建物）における周囲景観を詩として<詠む>行為などによって揺らいでたち現われるのであり、いわば周囲の自然・環境の呼びかけに呼応しながら

ら、集落とそこに住まう人の「存在性をそのつど復活せしめて」いるものなのである。

したがって、ここで究明がめざされる構造への視座は、制度的な秩序を単に維持していくスタティックなものではなく、客体的、近代科学的な認識以前の「生きられた世界」に立ち帰り、日常的に見慣れた世界と自己を繰り返し新たな布置におき、活性化させるような動態的な構造に注目するものでなければならぬであろう。伝統的な空間構造の動的な事象がそのような視座なり方法なりを要請するからである。

従来スタティックに捉えられてきた伝統的な空間構造をこのように動態的な視座から、言わば生成するものとしての視座から究明することを研究の目的とするのであるが、ここではその前提としてそのような視座をめぐって、次のような問題をひと通りあきらかにしておきたい。

(i) 上のような視座から捉えようと試みるわけであるが、そのことと現今の都市や建築の空間的問題に関心をもつ私たちの立場とは

どのような関連があるのであろう。どのような今日的な関心が研究への視座を支え動機づけているのか。

(ii) 上のような視座や関心から集落空間を捉えようとする場合、さまざまな側面を持つ韓国集落の空間構成要素の具体的に何をとりあげ、またどのように前景化することが適切であろうか。

(iii) 韓国の歴史民俗的世界という異文化・「他なるもの」を一体どのように理解するのであろう。空間構造の究明において私たちの分析や解釈の枠組を研究対象に押し付けるのではなく、また私たちが異他なる文化世界の人ともなりえないとすれば、理解はそもそもどのように可能なのか。

(iv) そして、上のような動態的な視座から韓国の集落空間に接近することためには、どのような「論述の仕方」が必要と考えられるのか。

1. 空間のドラマツルギー

ベーシックであり、よく知られている議論から始めたい。

空間というとき私たちが普通思い描くのは、ユークリッド幾何学的な三次元座標の空間であろうか。このような数学的抽象的な空間の特徴は原理的には、「等方・等質・無限・無中心(無原点)」²であるが、日常的に私たちが思い浮かべる空間はそこまで抽象化が徹底してはいないにしても、少なくともそれに近似した均質な表象と言えるであろう。すべてのものを測り、効率や能率に関心をもつかぎり、そのような空間の表象は必要であり、前提されているのである。

そのような均質な空間にモノや人を配置することを通して、またそのような空間そのものを計量化・数量化可能な対象とすることを通して、モノも空間をも何らかの目的のため

の道具とみなしつつ、自らを世界の中心とすることにより、いわゆる自然のなかに私たちが人間の支配を拡大してきたと言えるであろう。

そのような均質で抽象的な空間の表象は、その背景として発展する近代科学や技術が存すること³、また社会形態として私たちの生きる「近代」という世界を特徴づけるものであること⁴は、既に論者によって指摘されていることである。

この空間は単なる知的表象にとどまらず、建築空間やまた都市空間にさえ、そのような空間を形象化する強い傾斜が見られることも否定できない⁵。そこではそのような抽象化された空間への過度の傾斜によって人間の経験にある種の空洞化が招来されること、このような空間が人間存在の疎外態としてはたらいっていることの指摘もすでにめずらしいものではない⁶。

このような空間が一つの特定的見方であることを意識することは普段はないにしても、主題化してみればわかることは、このような抽象的な空間表象が私たちの具体的に生きて経験している空間とはどこか相違していることであろう。

私たちの生きている日常的な空間は、もとより等方・等質・無中心とは言い難く、さしあたり自らの「身体」を中心にして、上・下、左・右、前・後と分節されている。また「身体」の「ここ」からのいわば質的に分節されたパースペクティブの彼方にはある種の捉えがたい拡がり、いわゆる「地平」がひろがっていて、無限とはいえないのである。

しかし、「身体」はこのように自己中心的な空間を拓くばかりではなく、自己中心的な空間はまた同時に他者やものが現われる空間であるかぎりにおいて、他者やものが私たちの前にあると同時に、私はそれらの他者やも

のから捉えられている私を把握しているのであって、いわば「脱中心化」している空間でもある。すなわち私たちの生きている空間の基層には自己中心的であると同時に脱中心的な両義的な空間が拓かれているのである⁷。

ここでいう「身体」は現象学的な身体(Leib)ともいうべきものであって、諸器官の集合としての身体のごとき単に対象的な世界内部に他の事物と並んで見出されるもの(Körper)ではなく、対象世界の現われそのもののいわば媒体であって、世界に向かう運動的な志向性として問題にされるような身体といえる。

脱中心的な空間についてさらに続ければ、市川浩はよく知られているように、世界を分節し世界から分節される上のような「身体」を日本語の〈身〉として捉えたが、その〈身〉の脱中心化の一つの極限として、宗教的経験に典型的に現われるあり方を「超中心化」と名づけて(一方では数学的な均質空間を脱中心化のもうひとつの極限として無中心化と捉えるが)、例えば次のように言う⁸。

「超中心化は、すべてを均質化する知性的な脱中心化とはことなり、質的特異性を過度にし、超・特異化することによって、自己中心的・人間中心的現実性を超越する方向を示すのである。(中略)神話的空間においては、身体を原点とする自己中心的な質的座標系は、向こう側の原点に照らし出されることによって、非中心化され、身自身を支える神話的な質的座標系のうちに包み込まれる。」ここでは身を非中心化する「向こう側の原点」は、いわゆる「聖なる空間」として、上でふれた「地平」という言葉を使うならば、本来見えない「地平の彼方」が地平内の局所にいわば受肉するような事態と言い得るだろう⁹。

ところで、均質的な空間を前提とする技術が社会の隅々にまで浸透し、世界と自己までも技術の相のもとに見ようとする今日、上の

ような超中心化の可能性はどのようなものなのか。

例えばG・マルセルは聖なるものの経験の可能性への手掛かりとして、自らの旅行で出会った壮大な景観(アメリカ北西部オレゴンの森林やモンタナの氷河の渓谷)を例にあげながら、畏敬(awe)を抱かざるを得ないその「大きさ(magnitude)」の感情に言及している。そしてその「大きさ」が測りえないものであることを語る。また、記憶を越えた太古にまで遡る過去との関係をあげながら、そこでも測りえないものとの出会いを語る。さらに、測りえない人間の「生命」とその種々のあり方(誕生、死、幼な児など)の場に居合わせる経験を語る¹⁰。すなわち、いわば「統計化されない」空間・時間あるいは人間の生死をめぐる超中心化の手掛かりや可能性が示されている。

ここには深く広く世界の意味解釈が活性化するような、すなわち世界内での意味限定に尽きない或る深み¹¹やコスミックなひろがり帯びた中で、世界と自己があらたに再発見されるような場所が拓く可能性が的確に示されていないであろうか。

さらに、今日私たちが生きる社会は情報化社会でもある。情報メディアは基本的には均質な空間を前提にしているといえるであろう。情報の「量」が問題になる時、この量は空間の均質性をもとに測られているからである。このような均質な空間を前提としている情報環境における脱中心化の可能性とはどのようなものであろう。それに関しては次のような西垣通の所論¹²が私たちにとって示唆的である。

光ファイバー網などを通じて多量の情報を送りさえすれば濃密な情報の場が造作もなく出来上がるという通念を彼は批判しつつ、情報メディアにとって「生命的なコミュニケー

ション」や「豊かで深いリアリティ」が形成される可能性として脱中心化された場のはたらしに注意を向け、それに支えられた人間の経験を重視するのである。

「思いがけない出会いやブレイン・ストーミングなど非日常的な場でわれわれが興奮し、思考が活発になるのは誰でも経験があるだろう。なかでも、われわれの想像力が最も活性化され、情報の流れがもっとも速く、意味解釈の深さと広さがきわまるのは、いわゆる聖なる場ではないだろうか。これは太古からヒトの文化と共にあった。」

上の引用においての彼の「聖」と言う言葉¹³の使用が適切か否かは別として、これまでの歴史上の諸芸術の場に見られた脱中心化・超中心化する人間のあり方を顧みて、その創造的な可能性を将来の課題として示唆しているのである。

本研究では超中心化も広義に脱中心化に含めて考えてみたいのであるが¹⁴、それは私たちが向ける他者やものへのまなざしとそこからの再帰的なまなざしの自覚と言い換えてもよいかもしれない。

ところで、興味深いのは、西垣通がさらにそのような「場の構成」について次のように語ることである。すなわち、「建築にせよ、バレエにせよ、聖地にせよ、われわれがその場で感動し、自分の身体から宇宙に放射する広がりを感じとるためには不可欠な条件」があり、その条件とは ドラマ であり 物語 である。そして、場の構成のために必要なのは、そのドラマを支えるドラマツルギー（作劇術）である、と言うのである。

ドラマとは、対立的な世界と自己が、それを克服して新たな関係に入ることである¹⁵と言い得るとすれば、私たちはドラマに、世界と自己とのあらたな発見、先の言い方に倣えば「存在性の復活」の空間・場所的なモデル

を見出すことが許されるであろう。具体的な限定された環境世界だけではなく、脱中心的に世界に拓かれつつ、(さらに超中心化して世界「地平の彼方」に拓かれることをも含め、)世界と自己との関係のあらたな発見というドラマである。

私たちとしては、空間的なドラマツルギーということで、広義に脱中心化する空間の構成術を思い浮かべる。ドラマは演じるにしろ、享受するにしろ人間にとってすぐれて脱中心的にはたらく構造をもっている。

均質化に強く傾斜する現代の空間と関わるなかで、世界と自己とをあらたな布置におくような、広義に脱中心化する空間経験をどのように構成していくかというドラマツルギーすなわち空間の構成術は、今日の建築や都市の空間に生きる私たちにとって抜き差しならない関心である¹⁶。そして、そのような関心がこの韓国集落空間研究の視座を方向づけていると言えるのである。

2. 集落の舞台装置とエネルギー的行為

集落の中に世界と自己との関係が新たな発見されるような動態的な構造を究明しようとする視座は、集落空間でのドラマツルギー的な構成要素に目を向けることになるであろう。

集落の中で私たちが注目するものは、言わば伝統的な空間構造がもつドラマツルギー的な空間構成要素、いわば舞台装置としての、また空間構造に大きなはたらきをしている場所としての、広義に儀礼的な諸場所である。

ここでは儀礼を単に沈殿化した意味の慣習的な繰り返しとは捉えず、「一般社会の法や規則を超えた、その背後にあって存在を存在ならしめる伝統¹⁷」ともいうべきものとして考えることができるのである。

また集落空間でのドラマツルギーの構成要

素としてもう一つ重要なことは、舞台装置とともに言うまでもなくそこでドラマを演じ、そして享受する人間の行為である。

ところで、このような人間の行為に注目するとき想起するのは、アリストテレスの概念<キーネーシス>と<エネルギー>を藤沢令夫が周到に解釈した行為論である¹⁸。

この二つの概念は人間の行為の二側面を指している。すなわち前者は場所的運動や変化増減のごとき動きであって、目的を外在化した手段的道具的な行為であり、それはちょうど上で見た計量主義・能率主義に合わされた均質な空間・時間の中で生きる人間の行為に相当する。

一方それと対置される後者エネルギーは時間の内になく、目的を内在化した、いわば自足した人間の行為の側面やあり方をさすのである。

具体的に韓国集落の例をあげれば、既にふれた共同体祭(洞祭)時の集落の神域を<巡廻する>行為をどのように捉えるかについて上のことを考えてみるができる。集落を廻る行為を集落内の聖なる各神域への拝謁祈願するための歩行と捉えれば、廻る行為の外に目的をおいており、キーネーシス的である。一方、集落を廻る行為は歴史民俗的な「ノリ」(儀礼的な遊戯の意)であって、各神域に立ち寄って祈願するための行為というよりは、廻る行為そのものがよるこびとして自己目的的なものである。すなわち後者の方向で捉えれば、エネルギー的な側面を主として目を向けることになる。

もう一つ例をあげよう。先にふれた集落の亭子において、周囲景観にめぐって「景(いわゆる八景等)としての漢詩を<詠む>ことがあるが、景をその周囲景観のどこを見たらよいかを案内するいわば見所インデックスと考えれば、この景を詠む行為は見所を伝達案

内する目的のための行為となるであろう。しかしまた、景を詠む行為はそのような外在する目的を主とするものではなく、詠むこと自体がよるこびに満ちた自足した人間的行為として捉えることも可能であろう。

ブシケーのはたらきとされるエネルギー的な行為のあり方こそが「真の人間の行為」とするアリストテレスの洞察の深さを藤沢は衝撃を持って受けとめているのであるが、上述したように現今の均質な空間に自覚的に対置しようとする私たちもまた、このエネルギー的な行為の側面を前景化してみたいと思う。

集落の儀礼的な行為のエネルギー的な側面を主題化することは、その文化世界に住まう人々が生きているコスミックなひろがりある世界に導くように思われる。

先行研究の多くが、フィジカルな集落の空間構成要素とともにそこにおける機能論的・キーネーシス的な行為に強く傾斜する視点から分析していることを顧みて、キーネーシス的な行為に注意を払うことは当然として、同時にエネルギー的な行為の側面に焦点を定めることが一つの方途として考えられる。

3. 異文化理解への距たり

ところで、そのような視座・関心に沿って、異文化の集落空間を理解しようとするとき、理解をめぐって次のような問題に当面すると思われる。以下具体的に韓国の集落空間の特徴的な一側面を取り上げながらその問題のありかを考えてみたい。

韓国集落の周囲の山並みや水系はひとつの境界を形成しているが、それらは風水思想的な背景によって「四神砂(いわゆる玄武・青龍・朱雀・白虎)として捉えられることが多い。集落背後の「山々の連なり」=龍脈を通して流れてきた「生氣」は、風に乗ずれば散じ、

水に界されれば止まるが、四周の「四神砂」である山や川によって集め止められて、針灸において人体の経穴に比される「穴」とよばれる要諦なる場所に集中するという。栄華隆盛を得るための「生氣」を得ようとして、伝統的にはそのような「穴」にあたる場所に宗家や入郷祖の家屋など重要な建造物が建設されてきたわけである。

もう一例を示せば、集落の住居集中域の外周に「堂山(タンサン)」と呼ばれる神域が配置されている。上でみた集落を巡廻する行為はこの堂山群を廻ることになるわけであるが、それらの堂山の神霊(堂山神)は集落外部からの災いを防ぎ、村落の安寧と豊穡をもたらすとされる。

さらに、住居集中域をみれば、宗家や入郷祖やその家筋の家屋が占める場所とそれ以外の家筋が占める場所とは上下的な価値を含んだ空間分節が見られることがある。それらは儒教的ないわゆる「名分論」にしたがっていると考えられる。

このような風水思想や民間信仰や儒教などの思想・信仰背景によって私たちは韓国集落の様々な空間的な配置の一端を理解することができる。すなわち、集落の空間的な構造に接近するために、このようにまず私たちは対象とする文化を内在的に理解しようとするだろう。その文化に存する思想・信仰的背景などの文化的・社会的な背景・コンテクストをたどることによって、それをいわば説明を与えようとする。このような接近がまず必要であって、また重要であることは言うまでもない。

しかしながら、同時にそれらの理解が今日の私たちからは或る隔たりをおいた理解であることもまた否定し得ないのではないか。儒教的な名分論はともかくとして、風水的な「気の霊力」や「堂山神の靈威」といわれてもそ

のままでは私たちは身をもって共通了解し得るであろうか。

空間的分節を或る文化のコンテクストやパースペクティブに内在的に理解することが重要であることは言うまでもないが、そのような環境世界からの理解だけにとどめず、言わば個別的な環境世界とより普遍的な位相とが交叉するようなかたちで理解するためにどのような接近方法とればよいのであろう。

本研究で採るべき方法は上ですでにふれたような 巡廻する・見る・詠む といった人間の身体による行為という回路である。

4. 身体的行為と論述の仕方

文化や時代の相対性を超えて、私たちが異他なるものを理解する方途は現象学の知見によれば、私たちが普段は主題化することのない「生活世界(Lebenswelt)」へと立ち戻り、それを主題化することである。他者理解を媒介するのは生活世界であると考えられる。

生活世界に関しては、その地平性の核となる環境世界と、それと共に現われるその可能性の地平としての普遍的な生活世界の二義性が指摘されるが、私たちとしては文化的相対性を超える後者に遡らざるを得ない。

そのような生活世界の構造契機のひとつとして、運動感覚的過程での「わたしはなしている」「わたしは動いている¹⁹⁾」という身体のキネステーゼ(Kinästhese)をとりあげることができよう。

先に触れた「身体」は、このキネステーゼ的な身体的一面と考えられる。このキネステーゼ機能を通じて「自然」が開示され、それと共に時間・空間も開示されると考えられるが、私たちのこの自己と他者の区別が未分化な身体経験、「この特権的な経験を基礎にしてこそ、その経験とはひどく異なったものであれ、他の可能なものをわたしたちはかい

ま見ることもできる²⁰」のである。

この一種の前人称的な身体の素描、潜在的な「演技」、生まれたての行為は私たちの世界と自己についての一つの根源的な自覚のあり方でもある。「知の生きた源泉へと、つまり自分から最も距った文化的諸形成物をすら了解するその手段として己のうちで機能しているものへとたちもどる²¹」こと、すなわち理念化され客観化され、知的認識にもたらされる前段階のこのような身体的行為的なあり方にまさに身をもって入り込み、言わば同調ともいべきものから私たちは共通了解することが考えられるのである。

もとより、私たちが研究のフィールドで実際对象的に目にする行為は、上のような身体的行為的なあり方とは層位を異にしているわけであって、そのような初発的な行為へと一言わば遡源を試みなくてはならないことは言うまでもない。

そしてその時に問題になるのがその理解の「論述の仕方」であると思われる。

増田友也は、人がそこで生まれ、生育し、そして死にゆく場所にほかならない、土地、人、文化、伝統などを含めた全体的な環境として「ethnos (彼はエスノスと呼ぶ)」という概念を示した。ethnos はそこにおける重層する経験のさまざまな層位をふくむものと理解できるのであるが、そこを「建立する」ことによってあらためて現われてくるような、その意味で建築や計画の根拠となる場所的な概念として提示している²²。

言葉を叙述の道具、情報伝達的手段とみなす近代科学的、受動的な叙述方法に対して、その背景に存する、自らを世界や自然の中心として人間の支配を拡大するいわゆる人間中心主義への傾斜が指摘される今日において、上の増田の提示は示唆的である。すなわち、さまざまな経験の層位への接近がその論述の

仕方として、単に説明や記述だけではなく「建立する」行為、私たちに言い直せば詩的言語を介するような広い意味での人間の詩作・制作(ポイエーシス)を必須の契機として、いることの指摘である。集落空間構造において世界と自己とのあらたな現われを視座とする私たちとしてはこのような振幅を持った論述の仕方²³を自覚しておくことが必要であろう。

5. まとめ

i) 現代の均質な抽象的な空間への強い傾斜とそれに伴う経験の空洞化の中であって、広義に脱中心化された空間の構成(=空間のドラマツルギー)への関心がこの集落研究の視点を方向づけていること。

ii) したがって、集落の研究対象として前景化されるのは、伝統社会の空間的ドラマツルギーの二契機である広義の儀礼的な場所とそこに関わる人間の行為ということが考えられる。

特に行為に関しては機能論的・キネーシスの側面だけではなくエネルギー的な側面を見届けることがその文化のもつコスミックな世界への生きいきした接近を可能にすると思われること。

iii) 異文化の理解には、社会的・文化的背景から個別の環境世界を内在的に理解していくと同時に、文化の相対性を超えたより普遍的な層位を交叉させねばならないこと。

iv) その普遍的な経験層位への遡源の回路として身体的な行為に手掛りを求めること。

遡源的な理解・論述には、説明・記述とともに詩作・制作にも比される行為を含めた振幅が必要であること。

参考文献・註

1 増田友也「Ethnosの風景・素描 生活

- 環境の構成について 『増田友也著作集』 313頁, ナカニシヤ出版, 1999
- 2 O. F. Bollnow: Mensch und Raum (邦訳大塚恵一, 池川健司, 中村浩平, 『人間と空間』せりか書房, 16頁)
 - 3 例えば, 藤沢令夫『ギリシャ哲学と現代』岩波書店, 1980
 - 4 例えば, 真木宗介「時間と空間の社会学・序」現代社会学6, 岩波書店, 1996
 - 5 原広司「均質空間論」『空間<機能から様相へ>』岩波書店, 1987
 - 6 例えば, 前掲書1, 3など
 - 7 市川浩『精神としての身体』勁草書房, 1975, 27~37頁
 - 8 市川浩「方向性と超越」『超越の座標』講座現代の哲学5, 弘文堂, 1978, 24頁
 - 9 上田閑照『ことばの実存』筑摩書房1997, 12~13頁
 - 10 G. Marcel: Le sacré à l'âge technique, 1966 (邦訳, 渡辺義愛「機械時代の聖なるもの」マルセル著作集別巻, 春秋社, 1966)
 - 11 上田閑照『場所』弘文堂1992, 102頁
 - 12 西垣通『マルチメディア』岩波書店, 1994, 161~172頁
 - 13 聖性と情報社会を問題にすることは, 近代以前の神話的な空間を今日の情報メディアの場に直結させようとするわけではないだろう。彼は一方では情報メディアの場における聖性の暗黒面をも冷静に予測しているのである。西垣通『聖なるパーティクル・リアリティ』岩波書店, 1995
 - 14 脱中心化をそのように用いる例としては, 上田閑照『私とは何か』岩波書店, 2000, 51頁
 - 15 「ドラマとは要するに人間と世界とを対立的に捉えたうえで, その対立の彼方に新しい調和の回復をめざすものであり, ...」山崎正和『劇的な日本人』新潮社, 1971, 21頁
 - 16 建築・都市の計画構成を人間(あるいは人生)から考えようとする田中喬は様々な仕方で建築(術)と演劇(術)とをアナロジーで語っている。「人生と造型」『田中喬講演集』限定私家版, 1994, 「詩人の風景から」『建築家の世界 住居・自然・都市』ナカニシヤ出版, 1992
 - 17 青木保『儀礼の象徴性』岩波書店1984, 276頁
 - 18 藤沢令夫, 前掲書3および『アイデアと世界』第7章「現実活動態」, 岩波書店, 1980
 - 19 E. Husserl: Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, 1954 (邦訳, 細谷恒夫・木田元『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社, 1974, 228頁)
 - 20 小川侃『現象学と文化人類学』世界書院, 1989, 229~237頁
 - 21 M. Merleau-Ponty: Signes, 1960 (邦訳, 竹内芳郎, 「哲学者と社会学」『シーニュ1』みすず書房, 1969, 177頁,)
 - 22 増田友也 前掲書1および「法華クラブ京都店の建立に際して ethnos もしくは建築すること」『住居の根拠について』増田友也著作集』ナカニシヤ出版, 1999
 - 23 田中喬『小建築論』, ナカニシヤ出版, 1997は, 内発的・全体的な建築論を志向する途上において, 「(道) 詠う 抒べ・述べる 説く」という相互に補足し支えあう幅のある論述の仕方を提示している。